

Summer school at Eastern Finland University

千葉大の HP で見つけたフィンランド留学。協定校なので授業料がお安くなるということで応募してみました。5つほどプログラムがあったのですが、専門が看護なので公衆衛生の授業をとりました。レベルは大学院生と書いてあったのですが、こんな良い機会はないと思い、思い切って参加しました。

私が選択した”Public Health in the 2020’s”は生徒数 20 人で 15 カ国以上の学生が参加しており、想像通り私以外みんな大学院生でした。授業中、先生の話を通して質問が飛びかう活気のあるクラスで、私も負けじと質問してみたのですが、どうやらトンチンカンな質問をしていることも…。めげないことが大事です。授業では input と output が同時に行われました。健康を守る上でどのような問題が発生しているか、過去にそれらの問題をどのように解決したか等の事前知識を input した後、WHO 視点で解決していく手段を探る discussion が行われました。看護としての専門知識を身につけて行けばよかったと痛感したのがこの discussion の過程です。周りのクラスメイトたちは皆、修士課程で医学、経済学、政治学、公衆衛生、心理学等を専攻している人たち。彼らは自分の専門分野の視点から健康問題の解決法を探っていました。看護としての解決策を提示しなかったナ。問題として印象的だったのが、多くの発展途上国において、祈祷師の存在が病院受診を妨げているというものです。祈祷師の力が強い地域ではワクチン摂取することには困難が生じます。さあどうする？自分が WHO 職員だったとしたらワクチン摂取のために何ができる？ということ話をしました。答えのない問題を考えるというのは非常に興味深かったです。

授業後は毎日のように大学が用意してくれる social program があり、フィンランドの文化を大いに楽しむことができました。そのプログラムにはクラスメイトと仲良くなり、観光やパーティーやらを楽しみました。ヨーロッパの人たちはお酒が強いことを実感しました。みんな国も違えば言葉も違うので、所々垣間見える文化の違いが面白かったです。数々のプログラムに参加したのですが、特に楽しかったのはフィンランド式サウナ。サウナで熱くなった体で、冷たい湖に飛び込むのは至極の喜びでした。



Summer School の間、ゲストハウスのような場所に宿泊しました。上海からの留学生グループと仲良くなり、持ち寄りのお菓子をパーティーを開きました。日本から持っていた羊羹、ヨーロッパ出身のクラスメイトは口をすぼめていましたが、中国の子たちには大ウケでした。やっぱり中国とは食文化が似ているのですね。フィンランドで中国語学習会が開かれました。



隣の部屋に宿泊していたアフリカ大陸ガンビア出身のカップル。彼らも私と同じ Summer School の学生です。毎晩服を丸めてバスケットボールをしたり、トランプで遊んだりしました。私にガンビアディナーをご馳走してくれたので、翌日お礼に肉じゃがをご馳走しました。すぐに歌う陽気な人たちで、3人で音楽をかけて共有キッチンで踊るのが習慣になりました。衝撃を受けたのはガンビアの pop song にはサビがないことで、そろそろ盛り上がるかなと思う頃には1曲が終了なんてことも。これも文化の違いかなと(笑)



周りを見渡しても日本人が1人もおらず、全く日本語が通じることがない初めての環境でしたがなんとか生き抜くことはできました。強烈なホームシックに駆られ涙を流した夜もありました。今思えばそれもいい思い出です。『文化は違えど人間』がモットーになりました。

最後に留学支援室の小御門さん、ロバーツさん、西住先生には感謝の気持ちでいっぱいです。この方々がいなかったら閑散とした空港のベンチで夜を明かしていたと思います。様々なシーンで適切なアドバイスをくださりありがとうございました！